

書評

常光 徹著 『学校の怪談 口承文芸の展開と諸相』
関 一敏著 『聖母の出現 近代フォーク・カトリシズム考』
松山 巖著 『うわさの遠近法』

高木史人

〔一〕柳田国男の「口承文芸」研究が、「国語教育」論や、「方言」論と切り離し難いところから頭ち現れてきたことは、重信幸彦「『昔話』の発見——ある口頭伝承研究史の構想・覚書①」（『八口承』研究の現在）筑波大学歴史・人類学系日本民俗学研究室刊、一九九一）や高木史人「村の語り——柳田国男の「昔話」論小考——」（『語りの世界』16号、語り手たちの会刊、一九九二）などで論じられてきた。右の二つの論は「昔話」に的を絞った論だが、柳田の「国語教育」論、「方言」論、すなわち言葉にまつわる議論の延長上に、あらゆる「口承文芸」研究の領域が収められていたとみるべきだろう（たとえば、柳田「国語の将来」の小見出しを追いかけていくと、それが「口承文芸大意」のそれとほぼ重なってくることは重信論文に詳しく）。近代この方、不自由なもの言いに耐

えていた人々が、自らの力によって自分の言葉を開いて己の思いの丈を存分に「話す」技術を獲得することが、柳田の「国語教育」論の目的であり、そのために子供に対して「昔話」を聴き、批判力を養わせる必要があるとみたのであった。ところで、その時、「世間話」はどんな位置にあったかという点、それは子供が成長し、村人の中に混じって「話」をするための場、ということであった。「昔話」が「聴く」力を養うならば、「世間話」は「話す」力を養う機会を人々に提供するものということになる。

ただ、若輩の尋常人が、卒然として、說話の主となり、満座の視線の焦点となり得る場合は、個々の見聞の報告より他になかった。だから口舌の自信ある者が、競うてその機会を窺うたのである。これにはもとより個人の行動、群には知られな

い、抜駆けの試みが、やや自由になりかつ必要になっていくことを条件とするが、一方にはまたそういう話の種を儲けたいばかりに、好んで独立孤住する者のあつたことも推測せられる。本来は聴く者を樂しませ驚嘆させるのが趣意だから、報告とは言っても相応に誇張やほらが多く、かつ広すぎるほど取材の範囲の広いのが、おそらくこの種の説話の新しい魅力であつたらうと思う。世間話という語は学術的でないかも知らぬが、これらを総括しかつ昔話と対立させるのに、似つかわしい名前だから、私は採用する。

（柳田「昔話と伝説と神話」一五、傍点筆者）

こうして、「昔話」と「世間話」とは、同じ「話」ではあつても「対立」するものと位置付けられ、「昔話」と対になることによつて「話」をする場——「言葉」を発する場——、さらには柳田の「国語教育」の論において、「世間話」は一定の位置を占めることになつた、とひとまずはいえよう。

そこで、柳田の「国語教育」論だが、柳田は「国語教育」を近代の「学校国語教育」と

近代以前からの「昔の国語教育」とに分け、後者の歴史を知ることの重要性を説いた。

歴史の入手は私たちの経験によれば、安全なる改革を企てる者に最も痛切に感ぜられる。新たに機織る人でなければ、古い縞帳を出して見る必要がないのと同じである。(「昔の国語教育」)

柳田の「国語教育」論にとって、「国語教育」論は「歴史学」か「現在学」かという問いかけは、基本的に意味を持って来ない。「歴史」は、「今」そして「将来」に生かすための「歴史」となっている。そのように「歴史叙述」を試みる。ということは、「国語教育」論の延長上にみえる「口承文芸」研究の「歴史」もそういうことだろう。少なくとも目的の喪失した自働記述機械のごとき「歴史」ではないだろう。もちろん、筆者は柳田の「国語教育論」に全面的な賛意は表せない。何よりも「一国の物言いが、一つの標準語に統一せられるということは、何よりも望ましいことに相違ないが……」(「国語の将来」という「国語教育」の目的に対して、だが、「歴史」なるものの意味を「古い縞帳」

を引き合いに出して説く在り様は魅力的だ。現在そして将来というテキストのための「歴史(プレテキスト)」なのだと言いついてい「歴史」に軽重遠近をつけているのである。そうして「歴史」とは、「歴史」叙述とは、多分そういうものだろう。少なくとも、単なる前後関係の羅列ではあるまい。

ところで、「世間話」研究はどのように進んできたのか。それは「類型」性もしくは「伝承」性を希求しながら(少なくとも「口承文芸」研究では)、進んできたのじゃないか。「類型」や「伝承」は、「世間話」の「歴史」を追求するための道具立てであった。だが、それでは、何のための「歴史」なのか。柳田の「歴史」のように「古い縞帳」としての役割があるのか。目標があるのか。それが自覚されているか。それとも、自働記述機械のように無味乾燥の前後関係の羅列を「歴史」と称するのか。筆者は長らく「世間話」研究者からその「歴史」を探求する目的を、納得する形で聴いたことがなかったと思う。特に「世間話」と「類型」との関係を積極的にかつ執拗に論じて「歴史」の必要を説いた論文を待ち望んでいる(近年の重信幸彦

「『世間話』再考」『見本民俗学』一八〇、一九九〇年、日本民俗学会刊は、「歴史」への問いを多く含んでいた。

右のようなことを連々考えたのは、常光徹著『学校の怪談——口承文芸の展開と諸相』(ミネルヴァ書房、一九九三年刊、四〇二頁、二八〇〇円)を読んでだった。たとえば、近世の文献から析出した「類型」と現代の「学校の怪談」から析出した「類型」とを結びつけ、そこに常光は「伝承」、すなわちここで「歴史」を見るのであるが、そのような「歴史」が、「今」に、そして「将来」に逆照射して来なければ、何のための「歴史」か、と、あるいはこれが「歴史」だろうか、と問い返してみたくもなるのである。たとえば、「学校の怪談」が現在の学校制度の抑圧からの吐け口となったとする常光の説く「現在」と、右の「歴史」とがどう係わるのか。筆者にはお互いが相殺しあって論の説得力を減じているように思われる(ちなみに最近の教育史では、児童・生徒が受験・試験体制のもとで抑圧されていたのは、現代よりもむしろ明治期であったと考えられるようだ(斉藤利彦「学校・競争・淘汰——明治期における試験

と進学の態様」『思想』一九九三、九）。本書では「学校の怪談」という「話」の面白さを第一に評価したい。

〔二〕次に関一敏著『聖母の出現 近代フォーク・カトリシズム考』(日本エディタースクール出版部、一九九三年刊、二六八頁、二八〇〇円)に触れる。関の「歴史」は「近代」を見据えようとする。

あえて筆者の関心を要約するならば、近代社会における比較世界発生論と名づけておきたい領域である。聖母出現をめぐる論集の冒頭で、一見、場ちがいなポルターガイストの話をして見たのも、このことにかかわりがある。いまだに熟しているとはいえない領域をどのように方法的に主題化しうるかという問いであり、それを問う問いの仕方自身につけたいということである。いっぽうで出来事の細部にわけける視線と、他方で時代と社会を大きくつかむ視覚をどのように身体化できるかという課題は、史資料から過去の一事件を読むときにも、民俗調査の現場で未来にむけて動きつつある現在と過去をまのあたりにするときにも、いつも心を

はなれない問いである。筆者の現在は、このふたつの視線とそこから生まれるふたつのコトバの質と力には違いがあるという、ある意味であたりまえのことがよくやく分かってきたにすぎない。

(「序論 近代スピリチュアリズムの起源」(傍点関))

本書に扱われるのは、主として十九世紀のフランスにおける聖母出現という出来事である。ルルド、ポンマン、パリ、ラ・サレットにおけるそれらの出来事が、いかにして人々の中に受け入れられるようになったのかという経緯を、それこそ経と緯とを吹き吹きほぐすように、丹念に叙述する。そうしてその背景に教会の教義解釈を廻る政治史や、人々の生活、社会、交通等の変化(近代化)が控えめに提示される。また、それらの出来事がどのレヴェルで、今ここに図式化できるのかを、幾重にも関は提示する。だが、これが決定的な原因だとは主張しないし、大きな歴史の物語の中に還元して位置付けない。この禁欲的な態度に、読者の中には歯痒さを覚える人もいるかもしれないが、それは、これらの一個一個の小さな出来事を解釈するために

これだけの知と力とを要するのだと筆者が訴えているかのようである。ここには、クリフォード・ギアツの解釈人類学における「濃厚な記述」の影響がある。あるいはカルロ・ギンズブルグのミクロストリア論(これについては『思想』一九九三年四月号、岩波書店刊、が特集を組んでいる)の手捌きが想起される。また、右の引用文中にみえる「問い」は、われわれ「口承文芸」あるいは「口承」研究者にとっても強く、深く、静かに投げ掛けられた重要な「問い」である。

〔三〕三冊めに、松山巖著『うわさの遠近法』(青土社、一九九三年刊、四四八頁、二八〇〇円)を取り上げる。本書は、その書名「遠近法」が示すように、「歴史」の軽重遠近を、めりはりをつけて浮かび上がらせている。対象は日本の「近代」である。とにかく本書はさまざま「うわさ」が詰め込まれている。目次を掲げる。

1 兎、虎列刺、絹布そして唄

毒婦たちの栄光

鹿鳴館と任侠

世論と壮士

2 妖怪学と失念術

超能力の発見

芸術か、スキャンダルか

3 コラムの誕生と消滅 「茶話」の時代

天遣、自警団、この際、やつつけろ

英雄生存伝説と日本起源論異説

4 「清潔な帝国」下の『日乗』 荷風と昭

和初期

デマと統制 木炭もない 石炭もない

「清潔な帝国」と敗戦

5 「地」のうわさ、海の記憶

「口承文芸」の研究者からするならば、右の目次のタイトルは、今一つピンと来なかつたかもしれない。たとえば、「狐に化かされた話」や「タクシーの幽霊の話」などの、一類型だけの前後関係を追いかけるような、従来の研究者にとってのオーソドックスさはない。ここに強く窺えるのは、そのような統辭的な系譜関係というよりも、範列的に「うわさ」をつなぐことによって「近代」の「歴史」を叙述しようとする野心である。松山は「あとがき」の中で、本書の意図を三点挙げている。一点めは「うわさの類を素材にして近代日本の透視図を私なりに描いてみようと思ったこと」であり、二点めは「うわさは遠

い過去の記憶を幾重にも背負って現われることが多いから、逆にうわさの根を過去へと遡って捉えてみたい」ということ、そうして三点めは「現代のうわさについては（中略）近い過去のうわさを考えることで捉えようとした」ことである。この第一点めについては、大きな成果を取めたといえる。二点めについては、「近代」という枠内において説得力を持つかもしれない、と、今、一応は記しておく。だが、これを闇雲に手を広げていくと、「うわさ」のリアリティがどこかに雲散霧消してしまうことも、また論を俟たない。第三点めは、現代の「うわさ」のしくみや背景を考える上での参考になるということであろう。そうして、その「うわさ」のしくみだが、それは、「口承」というメディアに限らず、さまざまなメディアの複合の中にこそ息づいているということが重要なのである。

に、これらの「うわさ」「世間話」は、「口承」の場、「フィールドワーク」の場から寸断されて収められていった。その収載され、重ねられていったものの中から、類型を振り分けて整理し、そういうものが「うわさ」「世間話」だと得心していたのであった。そんな身からすると、松山の「資料」の到達さは異質だし、また「目次」の多様さは、やはりピンと来ないものだろう。だが、これは「口承文芸」から見た「うわさ」「世間話」に長く慣れ親しんだ者の見方なのである。本書の中の複合するメディア、多様な「うわさ」にこそリアリティがあり、わが「昔話集」や「民話集」の方が他人行儀に空々しく映り、「近代」や「現代」のリアリティを感じられないと、もし、大方の読者が考えるところならば、それは、「口承文芸」研究者に、「口承文芸」というジャンル（＝言説の差異）の設定をも含めて、研究の目的、方法、整理資料、フィールドワーク、これらの質について、切実なる反省と戦略の立て直しが迫られているということに他ならないのである。（出版社等のデータは本文中に記した。）

さらに「昔話集」あるいは「民話集」の中

（たかぎ・ふみと／跡見学園女子大学〔非〕）